

鬼上司さまのお気に入り

目次

鬼上司さまのお気に入り

5

番外編

二人の初めてモフモフ旅行

219

鬼上司さまのお気に入り

「データの数字が間違っている。それから誤字も多い。提出前に確認しなかったのか？ 何年この仕事をやっているんだ。新人のようなミスをするな！ もう一度研修からやり直すか!?」
(ひゃっ)

「す、すみません！」

十月中旬のある日のこと。株式会社アヤモト、東京本社第二営業部のオフィスに怒声が響く。それに、この場にいる誰もがひゅつと身を竦ませた。

今年の五月で二十七歳になった私、高梨歩美もその中の一人。

(うう、相変わらず心臓が悪い)

書類の束をデスクに叩きつけ、叱責の声を上げているのはこのトップである黒崎部長。

そして彼に怒られているのは、私と同じ営業事務員、太田さんだった。

どうやら、彼女がまとめた会議用の資料にミスが複数あったらしい。

(太田さん、うっかりさんだからなあ)

彼女はおっとりとして人当たりが良いのだけれど、うっかりミスが多いのだ。

本人も提出前に一応確認したのだろうが、そこでミスを見逃してしまったのかもしれない。一つ二つのミスなら黒崎部長もあそこまで怒らないけれど、聞く限り、ミスした箇所がずいぶん多そうだ。

(私も気を付けないと)

そう心の中で気を引き締めつつ、私は黒崎部長と太田さんの様子をこっそり窺った。

うちの会社は、喫茶関連の専門商社だ。東京本社の他に、大阪と福岡、仙台に支社を持つ。

その内、東京本社では営業部が第一と第二にわかれていて、第一ではレストランチェーンやカフェ、コーヒーショップのチェーン店などの大口の顧客を、第二では個人経営の喫茶店やカフェなどの小規模な顧客を担当している。

どちらも扱っているのはコーヒー豆や紅茶、業務用食材、業務用の焙煎機、粉砕機。その他、カフェやコーヒーショップで使用する抽出機やグラインダー、包材、家庭用のコーヒー関連器具やミル、コーヒーメーカーなど様々だ。

再びちらりと見てみたところ、我が第二営業部の部長、黒崎春信は眉間に深谷のような皺を寄せ、太田さんに説教を続けている。

艶のある黒髪に細い銀フレームの眼鏡をかけた彼は、切れ長の目にずっと通った鼻梁が美しい、整った顔立ちをしている。なまじ顔が綺麗なだけに、その怒り顔は迫力があって怖かった。しかも百八十センチを超える長身なのでなおさらだ。

ちなみに彼は、今年の四月に三十五歳という若さで部長に昇進した、当社一の出世株。

だから彼が去年の春、仙台支社から転勤してきた時には多くの女性社員が色めき立ったものだ。知的な美形で将来の幹部候補なエリート様なもの。そんな上等な獲物、肉食女子達が見逃すはずがない。

しかし黒崎部長の厳しい人となりが伝わると、彼に群がる女性社員は一気に減った。なにせ黒崎部長ときたら、擦り寄ってくる女性を「邪魔」の一言で切り捨て、食事や飲み会の誘いにも「時間の無駄」、「君と食事に行く暇があつたら帰って寝る」と言つたとか言わないとか。

人から聞いた話も多いので正確なところはわからないが、とにかく女子社員達のアピールや誘惑がまったく通じなかったらしい。

いくら高条件でも取りつく島がないのでは、肉食女子達だつて諦めるというもの。何故か美形率が高い我が社は、黒崎部長の他にもイケメンエリートがいるからね。

さらに黒崎部長は仕事面でも、自分にも他人にも厳しい人だつた。ミスは容赦なく叱責されるし、要求される仕事のレベルも高いので、みんな必死に仕事をしている。

そんなわけで、ついたあだ名が『鬼の黒崎』、『鬼の第二営業部長』。部下達だけでなく、他部署の人間からも恐れられているというのだから、ある意味すごい。

かくいう私も先月、『鬼の黒崎』から厳しい指導を受けたばかり。

私の脳裏に、ちよつぱり苦い記憶が甦つてきた。

あれは、先月の半ばごろのことだつたかな？

その日、私は黒崎部長から突然、新規の営業先に見せる自社商品の資料作りを任された。

ところが何度提出しても「駄目だ」と突き返され、やり直しに。

今思うと、あの時の私は「なんでこんな面倒な仕事を私が」という気持ちがあつて、「まあ、これくらいで大丈夫だよ」と、無意識に手を抜いてしまつていたんだろう。

そんないい加減な気持ちを見透かしたかのように、黒崎部長は容赦なかつた。

でも、あの時は自分でもそれに気付かず、何度も突き返されてへこんで、もうどう直していいかわからなくなつていた。

終業時間とはつくに過ぎて、部署に残っているのは私と部長の二人だけ。

そして再度資料を提出すると、部長はそれを見てようやく「駄目だ」以外の言葉を発した。

『商品の概要をそのまま載せるんじゃないくて、クライアントの立場に立つてわかりやすく書き直せ。ずらずらと情報を書き連ねられたら読む気が失せるだろう。お前が客ならどんな情報が知りたいか考える。それから添付する画像はもっと絞れ。その分、一つ一つのサイズを大きくした方が見やすくなる。あと、数字は……』

私は慌ててそのアドバイスをメモに書き留め、言われた通りに資料を作り直した。

するとできた資料は確かにわかりやすく、自社商品の魅力が伝わってくる仕上がりだつた。

そこで私は黒崎部長が今回の資料に要求するレベルを初めて知り、そりゃあ私の資料が突っ返されるわけだと納得したんだ。

まあ、もつと早く助言をくれたらよかったのにも思つたけど、あれはたぶん、私が自分で気付くのをギリギリまで待つていたんだろう。

それに、自分で「ここはこうした方が見やすいかな」と工夫した点に関しては褒めてくれたし。
『よく頑張ったな』

作り終えた資料を印刷し、確認してもらうと、黒崎部長はそう労^{ねぎら}ってくれた。

『正直、途中で泣かれるかと思った』

『んなっ、泣きませんよ!』

そ、そりゃあ、ちよつとは泣きそうになったけど。

ただどそのあと、「お前、けっこうできるな」と言われたのは嬉しかった、かな。実際、これをきっかけに大事な資料作りを任せられるようになったし。

しかもあの日の部長、資料の確認を終えるとすぐに帰り支度を始めたんだよね。

どうやら私の仕事が終わるまで、残業に付き合ってくれていたみたい。

黒崎部長はそれこそ鬼のように厳しいけれど、その厳しさの裏にある『部下達を育てる』という気概と、優しさを感じた瞬間だった。

彼は最年少で部長職に就いただけあって、とても優秀な人だ。黒崎部長が就任して以来、低迷していた我が第二営業部の業績は確実に上がっている。

前の部長は現場のことは課長任せだったし、今は退職した当時の課長は、体調不良で急な欠勤が日常茶飯事^{にちじうざはんじ}かつ、仕事は部下任せ。

上がそういう状態だから、営業の社員達も事務の社員達もモチベーションが低くて、ミスも多い。しかも「ミスは直せばいいでしょ」と、なんともぬるい空気が充満していた。

そんな中、当時の課長の退職が決まり、代わりに仙台支社から呼び寄せられたのが、その頃はまだ課長だった黒崎部長だ。

去年の春に第二営業部の課長として本社へ転属してきた彼は、今年の春に前任の部長が第一と第二、二つの営業部をまとめる統括部長に昇進すると、第二営業部の部長を任されることになった。

黒崎部長は課長として就任した当時から、ぬるかっただ第二営業部にバツバツサと改革のメスを入れていった。現場の仕事を部下任せにせず、進捗^{しんちょく}をすべて把握し、時には自ら顧客の新規開拓をする。

当初は前の上司と正反対のやり方に反発もあつたけど、結果が出るにつれ、その声はなくなっていくた。

だから恐れられてはいても、黒崎部長を心から嫌っている部下はいない……と思う。

私も、彼のことは嫌いではない。

むしろ上司としてはとても頼れる人だし、尊敬している。

(でもなあ。あんな風に頭ごなしにガミガミ怒るんじゃないくて、もうちよつと言いか方考えたらいいのに)

仕事に緊張感が必要だけど、それも過ぎれば毒になるんじゃないかな。

特に太田さんのようなタイプには逆効果な気がする。

そう思いつつ二人の様子を見ていたら、私の視線に気付いたらしい黒崎部長とぼつちり目が合った。

少し前の私だったら、慌てて目を逸らし、見て見ぬふりして作業を再開していただろう。

黒崎部長のお説教を止める勇氣なんて持てなかったはず。

でも、今は……

（部長、もうその辺でやめておきましょうよ）

私は目で訴えかけるみたいに、黒崎部長をじーっと見つめる。

するとアイコンタクトが伝わったのか、部長は皺の寄った眉間を指でぐりぐりと押さえたあと、太田さんに「もういい。席に戻れ。資料は修正して、再提出だ」と言った。

私はよかったと胸を撫で下ろす。そして、素知らぬ顔で仕事を再開する黒崎部長を眺めた。

『鬼の黒崎』、『鬼の第二営業部長』と、周りに恐れられている彼。

少し前まで、私も黒崎部長を恐れている部下の一人だった。

でも、今はちょっとだけ違う。

実は私、黒崎部長の意外な秘密を知ってしまったのです。

（まさか、部長にあんな一面があったなんてね）

パソコンの画面に視線を戻し、途中だったデータ入力作業を再開しながら、彼の秘密を知った日を思い返す。

それは、先週の金曜日のことだった。

一時間の残業を終えた私は、凝った肩を軽く揉みほぐしつつパソコンをシャットダウンする。

ふと顔を上げると、黒崎部長と目が合った。

（うっ）

なんか、このごろやけに黒崎部長と視線が合うんだよね。

もしかして、手が空いたならと次の仕事を言い渡される？

先日も「これで終わり！」と思ったところで新しい仕事を押しつけられたし。やたらと目が合うのも、隙あらば仕事をやらせようと狙っているからじゃないかと深読みしてしまう。

そんな経緯があつて身構えたものの、黒崎部長は何も言わずパソコンの画面に視線を戻した。

私はホッと胸を撫で下ろす。

仕事を任せてもらえるのは嬉しいけど、残業が長引くのは勘弁願いたい。パソコンの電源も落としちゃったしね。

「お疲れさまでしたー。お先に失礼します」

私は席を立ち、残っていた人達に声をかけた。

あちこちから「お疲れさまー」と、返事が飛んでくる。黒崎部長もパソコン画面から視線を外さないまま、「お疲れ」と言ってくれた。

そして私は更衣室で制服から通勤着に着替えると、都内にある自宅に帰った。

私は実家で両親と兄、飼犬の太郎さんと暮らしている。

両親と兄は獣医で、我が家は一階が動物病院、二階と三階が住居スペースの医院併用住宅というやつ。両親が運営し、三つ年上の兄も勤務する『高梨どうぶつ病院』は、毎週日曜と祝日が休診日

だった。それ以外は夜の七時まで診察を行っている。

といっても、場合によって閉院時間が延びることが多い。

この日も受付時間ギリギリに運び込まれた患者の処置に時間がかかったらしく、私が帰宅した時にはまだ、両親も兄も一階で仕事をしていた。

「ただいま、太郎さん」

「ワンツ！」

家族用の外玄関から二階に続く階段を上り、自宅に入ると、足音を聞きつけた愛犬の太郎さんが出迎えてくれた。太郎さんは茶柴の雄で、御年三歳。

太郎さんの夜ごはんは、いつも家族の誰かが仕事の合間にやってくれる。家族の手が空いていない場合は、うちに勤めている動物看護師さんが代わりを務めてくれていた。

私は太郎さんをひとしきり撫でたあと、自室でラフな私服に着替え、化粧を落としてキッチンに立った。

我が家では昔から両親が忙しかったため、家事は分担制だ。本当は今日の夕飯は母の担当なのだけれど、仕事が終わらない場合は、その時手が空いている人間が代わることになっている。

キッチンのホワイトボードに書かれた今日の夕飯メニューを確認し、ちゃっちゃと作ったころ、仕事を終えた両親と兄が二階のダイニングに現れた。

「ああ、お腹空いたねえ」

そう言ってお腹をさすりながら席についたのは私の父、高梨義康。五十七歳で、『高梨どうぶつ

病院』の院長先生だ。

身長は百六十センチと低く、体型はぼつちやうり。

かくいう私も身長は百五十五センチしかなく、ちよいぼちゃ体型だ。童顔なところも、今は短くしているふわふわの癖っ毛も、父によく似ていると言われる。

「ごめんね、歩美。今日はお母さんも急遽駆け出されちゃって」

謝りつつ席についたのは私の母、高梨凛子。

母は父と同じ五十七歳で、身長は百七十センチと女性にしては高く、すらっとした細身にキリッとした顔立ちの美女だ。

おまけに実年齢より若く見えるので、オーナーさん達（うちの病院では、飼主さんのことをオーナーさんと呼んでいる）からは『美魔女』だと言われている。

艶のあるストレートの黒髪を長く伸ばし、仕事中は一本にまとめている母は、娘の目から見ても恰好良い女性だ。どうして私は母に似なかったのかと、心底残念に思うよ……

「お、今日は牛丼か。嬉しいなあ」

そして先月三十歳になったばかりの兄、高梨健也は、母譲りの高身長に細身の体型で、顔立ちも母に似て整っている。

髪だけは父に似て癖っ毛だけれど、私と違って両親の良いところをして生まれてきた人だ。本当に羨ましい。

家族のことは大好きだけど、父のように頭が良いわけでもなく、母や兄のように容姿が整って

るわけでもない私は、ちよっぴりコンプレックスを感じている。

「それじゃあ、今日もみんなお疲れさまでした。いただきます」

「いただきます」

父の号令で、私達は手を合わせた。

我が家では、なるべく夕飯は家族揃って食べることにしているのだ。

ちなみにもうひとりの家族である太郎さんは、リビングにある自分用のベッドに寝そべり、構ってもらえるのを待っている。

「あ、そうだ。歩美、太郎さんの散歩が終わったら、入院舎の掃除頼んでもいいか」

食事の最中、兄がふと思い出したように言った。

「明日は休みだろう？」

「うん、いいよ。今夜はお兄ちゃんが夜勤なの？」

「そう。今は入院している動物も多いからな。手伝ってもらえると助かる」

『高梨どうぶつ病院』では、閉院後も救急の場合のみ、夜間診察を受け付けている。今日は兄がその夜勤担当らしい。

夜間救急以外にも、入院中の動物の世話や経過観察など、やらなければならないことは色々ある。

私は昔からそういった仕事を手伝っていたし、勤め人になってからも休みの前日や休日など、手が空いている時には手伝うようにしていた。

夕飯のあと、片付けは母に任せ、私は太郎さんの散歩に出る。

我が家では、朝と夜にそれぞれ一時間ほど散歩をすることになっているのだ。

帰宅したら、お気に入りの散歩コースを回ってご機嫌の太郎さんを父に預け、一階に下りた。

そして入院中の動物達の入院舎に行き、動物達の世話をする。といっても、夜のごはんは動物看護師さん達が退勤前にあげてくれるので、私がするのはトイレシートの交換や汚れているケージの掃除くらいだ。

一方、兄は経過が気になる子の様子を見ていた。

さすが、次期院長の若先生だ。獣医になったばかりのころはよく母に怒鳴られていたけれど、今ではすっかり様になってる。

「お兄ちゃん、ケージの掃除終わったよ」

「ああ、ありがとう。もう上がっていいよ」

「はい」

でもその前に、夜勤に励む兄にコーヒーでも淹れてやろうと、私はスタッフの休憩室に向かった。ここに簡単な給湯スペースがあるのだ。

(ついでに自分の分も淹れようっと)

薬缶に水を入れてコンロにかけた時、病院の電話が鳴った。

「歩美、悪いけど出てくれるか？」

入院舎から、兄の声が響く。

「はい！」

どうやら兄は手が離せないらしい。私はコンロの火を止め、受付に走った。たまに電話番もしているからね。こういうのも慣れている。

「はい、高梨どうぶつ病院です」

『夜分にすみません！ 実は、飼っているリスの具合が悪いんです。いつも行っている動物病院はもう診察時間外らしくて……』

電話してきたのは若い男性のようだ。焦っている様子で、口調が速い。

(……ん？ この声、どこかで聞き覚えがある気が……)

『そちらではリスも診ていただけますか？』

ペットとしてメジャーな犬や猫なら大抵の動物病院で受診できるけれど、それ以外の小動物や爬虫類、ちよっと珍しいペットなんかだと、受診できない動物病院もあるのだ。

「はい、当院ではリスの診察も受け付けていますよ。具体的にどんな症状が出ていますか？」

『よかった……。症状は、くしゃみと鼻水です。それから食欲がないみたいで、餌が全然減っていませんでした』

私は電話の声に耳を傾けながら、聞いた情報をメモ用紙に書き込む。

「なるほど。くしゃみ、鼻水、食欲不振ですね。わかりました。移動用のケージなどがありますか？ あればそれに入れて、保温対策をしっかりして、すぐ連れて来てください」

十月になって、最近はやもすっかり涼しくなってきたからね。

『わかりました！ ありがとうございます、すぐ向かいますっ』

『ではお名前……あっ』

よほど焦っているのか、男性は名前と連絡先を言う前に電話を切ってしまった。(しまったなあ)

だが、切れてしまったものは仕方がない。

入院舎にいる兄に電話の件を伝えると、そのリスとオーナーさんが来るまで受付にいてほしいと頼まれた。兄はもうしばらく、入院している動物の様子を見ていたいらしい。

「わかった」

どうせ明日は休みだし、予定もないしね。

私は病院玄関の鍵を開け、待合室と診察室の照明を点けて受付カウンターの椅子に座り、リスとオーナーさんの訪れを待った。

その間、コーヒーを飲みながら、オーナーさん向けに待合室に置いているペット雑誌をばらばらと読む。

「あ」

電話があつてから、二十分ほど経っただろうか。

時計の針が深夜零時を指す少し前、外に車のヘッドライトの明かりが見えたかと思うと、駐車スペースに一台の車が停まった。リスのオーナーさんかな？

続けてガチャッ、バタンと扉を開閉する音が響いて、バタバタと駆け込んでくる足音が聞こえる。

「すみません！ 先ほど電話した者ですが!!」
(えっ)

血相を変えて待合室に飛び込んだきたのは、なんと私の上司である黒崎部長だった。いつもきっちり整えている髪は乱れ、いかにも仕事帰りらしいスーツに薄手のコートはおを羽織はっている。

(ええええええええええええええええ!!)

「早く、うちのアリスを診みてやってください!」

彼はよほど動揺しているのか、私が部下の高梨だと気付いていない様子だ。

小動物用のプラスチック製ケージを持って、受付に座る私に迫せまってくる。

(あ、あの黒崎部長が、あの『鬼の黒崎』が、リスを……。しかも名前がアリス)

黒崎部長は確か独身のはずだから、子どもが飼っているペットということはない。

「す、すぐに診みますので、落ち着いてください。こちらへどうぞ」

私は黒崎部長の剣幕に気圧けおされつつも、彼とリスを診察室に案内し、入院舎にいる兄を呼んだ。

(いやあ……。まさか黒崎部長が、あんなに狼狽ろうばいするとは)

普段の冷静な姿が嘘うそのようなうろたえっぷりだった。

まあ、それだけペットのリスを可愛がっているのだろう。

家族同然の愛いとしいペットの病気や怪我を前に、冷静でいられる飼い主はいない。

中には号泣しながら駆け込んでくる人や、心配のあまり貧血を起こして倒れてしまう人もいる。

(あのリスちゃん、大丈夫かな?)

これで私の役目は終わりだったのだけれど、なんとなく気になって、受付に座ったまま診察が終わるのを待つ。

しばらくすると、診察室から黒崎部長と兄が出てきた。

黒崎部長がリスの入ったケージを持ったままということ、入院せずに済んだようだ。

兄は「そちらでしばらくお待ちくださいね」と黒崎部長に待合室のソファを勧める。それから診察室で書いてもらったらしい問診票を手受付カウンターに入ってきて、診察券を発行した。

うちの動物病院の診察券は、表に可愛らしい犬と猫が描かれたカードタイプ。裏には診察時間と電話番号、それからオーナーさんとペットの名前の欄がある。

兄はそこに、油性ペンで『黒崎春信』と書き、その下に『アリス』と書いた。ちなみにペットの名前の横には『ちゃん』と印字されている。

(リスの黒崎アリスちゃん、か。黒崎部長のネーミングセンスよ……)

続けて兄は薬局で薬を用意すると、ソファに座る黒崎部長を呼んだ。

「抗生物質を十日分出しておきますね。しばらくこれで様子を見て、また何かあればいつでも来てください」

兄は黒崎部長を安心させるように微笑んで、薬の入った袋と診察券を手渡す。

「ありがとうございます。こんな時間にこれくらいのことで大騒ぎして押しかけて、すみませんでした」

「いいえとんでもない。それにただの風邪でも、リスには十分脅威です。進行が早く、肺炎になつて亡くなつてしまう子もいます。すぐに来てもらえてよかったですよ」

なるほど、アリスちゃんは風邪だったのか。

兄の言う通り、風邪で亡くなつてしまうリスは多い。

様子見と思つて受診を躊躇^{ためら}っているうちに亡くなつていた、というケースもある。

そんなことを考えている間に、兄と黒崎部長は会計を済ませていた。

「ありがとうございます」

「お大事に」

「お、お大事に」

兄に続いて、私もようやく口を開く。

すると、受付前から立ち去ろうとした黒崎部長の顔色が目に見えて変わった。

「あつ、たつ、たか……なし……!？」

「ど、どうも。こんばんは、黒崎部長」

正直、「今ごろ気付いたの!？」と思つたが、さすがにそれは口にしない。

そして黒崎部長はというと、驚きに目を見開き、言葉を失くしている。

まあ、そうだよ。鬼上司と恐れられている自分が動揺する姿を、部下の私にばっちりしっかり見られちゃったんだもんね。

しかも動揺の原因が、可愛いペットのアリスちゃんの風邪。

(あー、見なかったことにしてそつとフェードアウトすべきだったかなあ? ごめんなさい、黒崎部長)

絶句する黒崎部長と気まずさに苦笑するしかない私を尻目に、兄は「え? もしかして歩美の会社の人? 部長さん? これはこれは。いつも妹がお世話になつてます」と呑^{のん}気に頭を下げた。

「あ、いえ。こちらこそ」

かううじてそう答えた黒崎部長はその後、狼狽^{ろうばい}したままアリスを連れて帰つたのだった。

あの時は黒崎部長が動揺のあまり事故を起こしやしないか、ちよつと心配だったつけ……

私は入力を終えたデータに間違いがないか確認しつつ、当時の心境を思い出して苦笑する。

そんなわけで私は、黒崎部長がイメージにまったくそぐわない可愛らしいリスを飼っていること、そのリスを溺愛していることを知つてしまった。しかも、その話にはさらに続きがある。

あれは部長がうちの動物病院に駆け込んできた三日後。月曜日の朝礼後だった。

私のパソコンに、黒崎部長からメールが届いたのだ。

『すまないが、今日の昼休みに時間をもらえるか?』

メールには、昼休みになつたら会社の最寄り駅の改札前まで来てほしいと書かれてあつた。

また、返信後にこのメールを削除するようにとも。

(これって、アリスちゃんの件だよ)

仕事の話なら、こんな風にコソコソしないだろう。仕事以外で思い当たるのは、先日のアリス

ちゃんの件しかない。

(しかし、なんで駅の改札前で?)

ちらつと部長のデスクに視線を送ると、彼は洗面を浮かべ、こちらを睨んでいた。

(ひえっ!)

その形相にちょっとビビりつつ、私は『わかりました』と返信をし、部長のメールを削除する。

そして昼休み。今日は外で食べてくると同僚に伝え、制服の上にカーディガンを羽織り、バッグを手に会社を出た。

最寄り駅までは、徒歩で五分ほど。

指示通りに改札前で待っていると、時間差をつけて社を出た部長がこちらにやってきた。

「待たせたな」

「いえ、あの……」

「すまないが、話は後だ。付き合ってくれ」

言うなり、黒崎部長は改札の中に入っていく。

私も慌ててその後が続いた。

ちょうどホームにきた電車に乗り、二駅先で降りる。

そのまま無言で歩く黒崎部長についていくと、辿り着いたのは一軒のお店だった。

(鰻屋さん?)

お店の暖簾には、白抜きで屋号と鰻の絵が描かれている。

辺りには、鰻を焼く香ばしい匂いが漂っていた。なんとも食欲をそそる香りだ。

「入るぞ」

「は、はあ……」

店内に足を踏み入れた部長は、店員さんに「予約していた黒崎ですが」と声をかける。

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

店員さんに通されたのは、個室になっている座敷席だった。

(どういうこと!?)

状況についていけずに戸惑っていたら、私の向かいに座った黒崎部長がメニュー表を差し出してきて、「なんでも好きな物を頼め。俺の奢りだ」と言う。

「えっ、な、なんですか?」

「口止め料だ」

「口止め料?」

「……その、金曜の件だ。お前にはみつともない姿を見せてしまった。アリスを飼っていることも含めて、できれば黙っていてほしい。これは、その口止め料だ」

「は、はあ……」

つまり部長は、私に先日の件を口止めするためにここへ連れてきたらしい。

わざわざ会社から少し離れたお店の、しかも個室を予約するあたり、よほど会社の人達には知られたくないのだろう。

(まあ確かに、これまで築いてきた黒崎部長の厳格なイメージが崩れちゃうもんね)

いやしかし、アリスちゃんの件で口止めされるのかなとは思っていたけれど、まさか問答無用で鰻屋さんに連れてこられて、いきなり「口止め料になんでも奢ってやる」と言われるとは。

(黒崎部長って、変わった人だったんだな)

先日的一件から、黒崎部長のイメージがどんどん崩れていく。

(でもなんか、今の部長はとつきやすく面白、かも)

「どうした。特上でも構わんぞ」

黒崎部長は眉間に皺を寄せ、このお店で一番高い特上うな重を指差す。

う、うわあ。特上うな重、税抜き三千三百五十円だよ！ ランチ一食で三千円超えとか！ 薄給のOLには、とても手が出せない代物です。

「もしかして、鰻は苦手だったか？」

「い、いえ！ 大好きですけど、あの、ここまでしていただかなくても、他の人にバラしたりしませんよ？」

昨今は動物病院だって、個人情報扱いには厳しいのだ。

ペットやオーナーさんの情報を漏らすなんてもつてのほか。

そんなことをしたら、私が両親に——主に母に、こっぴどく叱られてしまう。

「だから安心してください、黒崎部長」

「……そうか。しかし、せっかく来たんだ。なんでも好きな物を頼め」

予約までしたのに、食わずに帰るわけにはいかない。

そして自分が連れてきたのだから今回は奢ると、黒崎部長は主張する。

(うーん、まあ、それで黒崎部長の気が済むなら)

私はちらっとメニューを見て、この店で一番安いうな丼を選んだ。まあ、これでも余裕で千円以上するんだけどね。

しかし黒崎部長は「遠慮するな」と私の注文を無視し、呼び出した店員さんに「特上うな重二つ」と頼んでしまった。

ぶ、部長！ なんでも好きな物を頼めって言ったのにー！

(元から吹聴するつもりはなかったけど、ここまでされたら是非でも秘密を守らなきゃって気になるじゃん)

案外、それが狙いだっただのかもしれない。さすが営業部の元エース。策士だ。

上司に高いランチを奢ってもらうのは気が引けるものの、こうなったらもう腹を括って堪能させていこう。

私は店員さんが持ってきてくれた温かいお茶を一口飲み、ふうと息を吐いた。

「そういえば、その後、アリスちゃんの様子はですか？」

(あ)

質問してから、二人きりでもアリスちゃんのこととはもう話題に出すなと怒られるかな？ と思っただけれど、部長はふっと表情を和らげ、「今はもうすっかり元気だ」と嬉しそうに言う。

(わっ……)

その笑顔に、私は「部長も笑うんだ」と驚いてしまった。

いやだって、一緒に働いて一年以上経つけど、笑ってるところなんて初めて見たよ。

「薬を飲むか心配していたんだが、美味^{うまい}そうにペロペロ舐^なめている。あれはそういう味付けになっているのか？」

「さ、さあ？　そこまではわかりませんが、薬を飲んでいるならよかったです。食欲もありますか？」

「ああ。食欲は戻ったし、鼻水やくしゃみも出なくなった。お兄さんにも礼を言っておいてくれ」
「はい、兄も喜びます」

それからうな重が来るまで、私は部長に聞かれるまま家の話をした。

動物病院は両親と兄が切り盛りしていること、私もたまに手伝っていることなどを話したのだ。それから、うちもペットを飼っていることも。

「だから、部長が狼狽^{うろた}していた気持ちはよくわかります。兄も言っていましたけど、また何かあったらいつでも来てくださいね。うちは動物病院の上に自宅があるので、救急の場合は休診日や診察時間外でも受け入れてますから」

「そう言ってもらえるとありがたい」

部長はそう口にして、お茶の入った湯呑を手にとった。

しかし、すぐに口をつけず、ふうふうと息を吹きかけたあと、またテーブルに戻してしまう。

(もしかして、黒崎部長は猫舌なのかな？)

そういえば、職場でコーヒーを淹^いれた時も、すぐに口をつけず、しばらくしてから飲んでいたっけ。あれは仕事に打ち込んでいるうちにコーヒーがあることを忘れたのかと思っていたけれど、単に冷めるのを待っていただけだったのかもしれない。

(ふふっ)

また一つ、黒崎部長の意外な一面を知ってしまった。

今度部長にコーヒーを淹^いれる機会があったら、ぬるめにしておいてあげよう。

そして私はその後、運ばれてきた特上うな重をありがたぐちそうになったのだった。

(あの時のうな重、美味^{おいしい}しかったな)

さすが『特上』と付くだけのことはあった！

身はふんわりと柔らかくて、特製の甘辛いタレが絡んだご飯と一緒に口に運ぶと、まさに至福のお味でした。

なんて、ついあの時のうな重の味を思い返していたら、黒崎部長がこちらをじっと見ていることに気付いた。

や、やばい！　これじゃさつき私が部長を見ていた時とは逆だ！

お前、何をサボっていると言わんばかりの厳しい視線に、私は慌てて姿勢を正して作業を再開する。

(うーん)

だけどやっぱり、私は前ほど黒崎部長のことが怖くない。

それは、他人に知られたくない彼の秘密を握っている、という理由もあるのだろうけど、何より……

黒崎部長が可愛いリスにメロメロな一面を持つ、案外面白くて優しい人だと知ったから、なのだと思う。

二

ひょんなことから、鬼上司である黒崎部長の秘密を知ってしまった私。

けれど元々それを吹聴する気はなかった上、口止め料にお高い重を奢ってもらったことで、その件はこれで終わりだと考えていた。

ところが、黒崎部長の方はそう思っではいなかったようで……

「ああ、高梨か」

「お疲れさまです、黒崎部長」

第一と第二、二つの営業部があるフロアには、自販機とテーブルセットが置かれた休憩スペース

が設けられている。

かつては喫煙所も兼ねていたのだけれど、時代の流れで我が社が全面禁煙になったことで、ただの休憩スペースになった。

仕事が一段落ついたので、休憩がてら飲み物を買いにここへ来たら、先客が一人。黒崎部長だ。

ペットボトルのミネラルウォーターを飲んでいた彼は、財布だけを手にした私を見ると、「飲み物休憩か」と尋ねてくる。

「はい、たまにはジュースでもと」

喫茶関連の専門商社だけあって、我が社の各部署には、コーヒーマーカーや紅茶のティーバッグなどが各種揃っている。

種類も多いしとても美味しいのだけれど、たまにそれ以外のものも飲みたくなって、こうして自販機に買いにくるのだ。

目当てのジュースが入った自販機の前に立つと、私より先に、黒崎部長が五百円玉を投入する。

「あっ」

「奢ってやる」

「い、いや、悪いですよ」

「ジュースくらい、気にするな」

「でも」

「早くしないと、おしるこにするぞ」

「うわっ」

部長が意地悪く笑いながら、おしるこのボタンに指を伸ばす。

私は慌てて目当てのジュースのボタンを押した。

おしるこは別に嫌いじゃないんだけど、今は飲みたい気分ではないのだ。

「……ありがとうございます」

「ああ。じゃあな」

そう言っつて、黒崎部長は飲みかけのペットボトルを手にスタスタと部署へ戻っていく。

私は彼に奢^{おご}ってもらったジュースの缶を手に、「ふう」とため息を吐いた。

実は、こんな風に黒崎部長に飲み物を奢^{おご}られるのは初めてではない。

口止め料としてうな重をこちそうしてもらったあとも、黒崎部長は何かと私に飲み物や軽食を奢^{おご}ったり、ちよつとしたお菓子をくれたりするようになったのだ。それも人目につかない場面で、こっそりと。

つい先日にも会議の準備を頼まれて、人数分コピーした資料を手にも会議室に向かったら、先に来ていた黒崎部長に手招きされて「ほら」とおまんじゅうを渡されたっけ。

なんでも、来社した顧客から旅行のお土産^{みやげ}にともらったらしい。

（いや、あれは渡されたというか……）

正確には『食べさせられた』かな。

いったい何を思ったのか、部長ったら自分で包装を解^{ほど}いて、そのおまんじゅうを私の口に突っ込

んだんだよね。

『んむっ!?』

『美味^{うま}いか?』

いや美味^{おい}しいですけども!

（どうしていきなり口に突っ込むかなあ? しかもこのおまんじゅう、けっこう大きい）

普通に渡してくれればいいのにと抗議の視線を部長に向けながら、私はもぐもぐとおまんじゅうを咀嚼^{そじく}した。

だって一度口にしちゃったら、あとはもう食べるしかないじゃないですか。

そんな私を、黒崎部長がものすごく優しい眼差^{まなざ}しで見つめてくる。

（う……）

まるで可愛いペットでも愛^めでているかのような視線に、私はソワソワと落ち着かない気持ちにさせられた。

（は、早く食べ終わらなくちゃ）

こちらをじつと見つめてくる部長の前で懸命に口を動かす時間は、なんとも気まずい一時^{ひととき}だった。そしてようやく食べきると、黒崎部長はふつと目尻を下げ、「ついてる」と言っつて私の唇の端を指で拭^ぬったのだ。

『……っ』

急に触れられて、ドキッとした。

しかも触れられた理由が口の汚れとか間抜けすぎるし、その汚れを上司に指で直接拭いてもらうなんて恥ずかしいやら何やらで、ひどくいたたまれなかったなあ。

とにかくそんなわけで、このごろの黒崎部長はやたらと私に物を与えてくるのだ。

(うーん、そんなに私が言いふらさないか不安なの?)

黒崎部長にこっそりお菓子をもらったり、奢ちつてもらったりする度たび、「わかつてるな? 例の件は絶対に口外するなよ」と念を押されている気になる。

だけど、それだけ彼にとつてアリスのことは人に知られたくない秘密なのだろう。

私がどんなに「言いませんよ」と主張したところで不安が解消されないなら、もらえるものはありがたくもらって、黒崎部長の心の平和に貢献した方がいいのかもしれない。

そう思うものの、これまで尊敬しつつも恐れていた黒崎部長に頻ひん繁に絡まれるようになったのは、ちよつと居心地が悪い。

決して嫌なわけじゃないんだけど、なんというかこう、彼に近付かれる度たび、落ち着かない気持ちになるのだ。

(まあ、でも、そのうち収まるでしょう)

心の中でひとりごち、私はジュースを飲み干したあと、自分のデスクに戻った。

あんまり長く席を外していると、サボっていると思われかねないからね。

それから少し時が過ぎて、十月も後半になった。

街はすっかりハロウィン一色に染まっている。

我が第二営業部の顧客である喫茶店やカフェでも、ハロウィン限定のメニューを展開しているお店が多い。中にはちよつとしたコスプレをしてお客さんを迎えているところもあるんだとか。私も行ってみたいな。

そんなことを考えながら仕事をしていた金曜日のこと。

明日からの休みを思うと心が浮き立つ終業時間間近になって、私のパソコンに黒崎部長からメールが届いた。

(なんだろう?)

件名のないそのメールを開いてみると、文面は一言。

『今日の夜は空あいているか?』

ちらりと黒崎部長の方を見たところ、彼は素知らぬ顔で、部下から提出された書類を読んでいる。

『空あいていますが、何かご用ですか?』

と返事を打てば、しばらくしてメールが返ってきた。

『夕食を奢ちつてやる。付き合え』

なんという上から目線。いや確かに相手は部長様ですけども。

(むう……)

『奢ちつていただく理由がありません。口止め料ならもう十分すぎるほどいただいています』

ほどなく『嫌なのか?』という文面が送られてきた。さらにそのメールには、『無理強むりじいはしな

いが、よければ付き合ってもらえると助かる』とも書かれている。

（まあ、予定があるわけでもないし、黒崎部長とごはんを食べるのは無理！　ってことはないし。ただ……）

『割り勘なら行きます』

ネットクになっているのはそこなのだ。

これまでもさんざん奢^{おご}られてきたのに、また食事を奢^{おご}ってもらうのは気が引ける。

『わかった』

すると、時間と待ち合わせ場所が送られてきた。

それから、一連のメールを削除しておくようにとの指示も。

確かに、誰かに見られたら誤解されそうな内容だもんね。

（なんだか社内不倫してるカップルみたい）

しかし、ここまでして口止めしたがるなんて、黒崎部長って本当、執念深^{しつもん}……いやいや、慎重な性格なんだなあ。

でもいい加減、口止め料はもうけっこうです、ときっぱり言った方がいいのかもしれない。

（さすがに申し訳ないもんなあ）

そう思いつつ、私はメールを削除し、仕事を再開した。

幸いというか、その日は残業になることもなく、私は定時で会社を出た。

部長の方はもう少し仕事が残っているようだったけれど、約束の時間まではまだまだ余裕がある。いったん家に帰ろうか迷ったものの、それはそれで面倒だったので、待ち合わせ場所の駅に入っている商業施設で買い物をしつつ、時間を潰すことにした。

ちなみにこの駅は、会社から離れた場所にある。

部長はやはり、会社の人に私と二人きりで見られるところを見られたくないのだろう。

私としても、知られたら騒^{さわ}がれるのが目に見えているため、ありがたいけれど。

（前より静かになったとはいえ、まだ黒崎部長のことを諦^{あきら}めていない女子社員もいるみたいだからねえ）

いつだったか、我が社で人気のイケメン社員とデートしていたと噂^{うわさ}された女子社員がひどいやつかみにあったのを知っているの、そういうった事態は避けたいところだ。女の集団は怖いのである。まあ、これは別にデートじゃないけど。

黒崎部長にとっては、ただの口止めの一環なんだろうし。

（でも念のため、変装でもしておく？）

ウィッグを被^かってサングラスをかけて……なんて馬鹿なことを考えながらウインドウショッピングを楽しんでいたら、約束の時間になっていた。

「うわ、やばっ！」

私は慌てて待ち合わせ場所の改札前に急ぐ。

すると、そこにはすでに黒崎部長の姿があった。

「す、すみません！ 遅くなりました！」

やばい怒られる！「俺より先に社を出たのになんで遅刻するんだ！」って怒られる！
そう思っ、私はがばつと頭を下げて謝罪した。

しかしいつまで経っても怒声は降ってこず、恐る恐る頭を上げると……
「くくっ」

「へ？」

黒崎部長は肩を震わせて笑っていた。

そんな風に笑う姿なんて初めて見たから、私はぼかんと呆けてしまう。
なんで笑ってるんだろう？ 私が謝罪する姿、そこまでおかしかった？

「ぶ、部長？」

「いや、お前、その髪」

彼は笑っている口元を左手で押さえつつ、右手で私の髪を指差した。

「鳥の巣みたいになってるぞ」

「うわっ」

走ってきたせいで、髪がぼさぼさに乱れていたらしい。

指摘されて焦って手櫛で整える。癖っ毛だから、すぐこうなっちゃうんだよ！

恥ずかしい！ で、でも！

「鳥の巣って、そこまでひどくないですよ！」

髪を整えながら抗議すると、黒崎部長は笑い顔のままで「すまん、すまん」と言った。

それ、ちつとも悪いと思っ、てないじゃん！ もう！

ま、まあ、おかげで遅刻を怒られなかったのはよかったけどさ。

「じゃあ、行くか」

「はい」

今夜の行き先は、この駅の近くにある居酒屋らしい。

メールにそのお店のサイトのURLが添付されていたので見てみたけれど、お酒の種類が豊富
上に料理が美味しそうで、なかなか素敵なお店だった。楽しみだ。

駅を出て、歩くこと数分。

お店に入ると、今回も黒崎部長が事前に予約していたようで、個室に案内される。掘り炬燵式の
席なのが嬉しかった。

シヨート丈のトレンチコートを脱ぎ、部屋に備え付けのハンガーにかける。

黒崎部長の分も、と手を差し出せば、彼は「ありがとう」と言っ、て、薄手のコートを手渡して
きた。

その時、ふわりと黒崎部長の香りが鼻を掠める。

冷徹なイメージに反した少し甘めの香りに、ちよつぴりドキッとしてしまった。

「高梨は酒、飲める方か？」

「あ、はい。好きで、けっこう飲みます」

席につくと、黒崎部長がメニュー表を見せてくれる。私に見やすいよう、こちらに向けて。そういえば、部長はあんまり部の飲み会に参加しないから、黒崎部長と一緒にお酒を飲むのって去年の歓迎会以来だ。

それも、当時は彼狙いの他部署の女子社員まで集まっちゃって大人数になってしまった。なので私は隅っこの方で気の合う同僚と飲んでいて、部長と一緒に飲んだって感じじゃなかった。

確か、あの時部長はあんまり飲んでなくて、一次会だけ出てすぐ帰ったんだっけ？

「部長は、お酒は？」

「俺も好きでよく飲む。ただ、アリスを飼ってからはもっぱら一人で宅飲みばかりだ」

あとは接待で飲むくらいだな、と黒崎部長は言う。

（一人で宅飲み？）

そこで私はふと疑問を覚えた。

今の話しぶりからすると、仕事以外で一緒に飲む相手がいないみたい。

「あの、部長って、彼女とかいないんですか？」

意外に思ってた尋ねると、黒崎部長は苦虫を噛み潰したような顔で、「いたらお前と二人きりでここには来ないだろう」と答える。

「あ、それもそうですね」

口止めのためとはいえ、女の部下と二人で飲みなんて、彼女がいたらしないか。

「でも意外ですねえ。部長、モテるのに」

「うるさい。ほら、何にするんだ」

この話はこれで終わりだとばかり、黒崎部長がメニュー表を突きつけてくる。

「ええと、最初は生で」

「俺も。あとは適当に料理を頼むか」

私達はあーだこーだとメニューを選び、生ビール二杯とおつまみになる料理をいくつか頼んだ。

そして注文を受けた店員さんが部屋を出るなり、黒崎部長は自分のスマホを取り出して、私に見せてくる。

その時、部長の眼鏡がキラッと光った気がした。

「これを見てくれ。うちのアリスの激力ワシヨットだ」

「へっ？」

（げ、げきかわしょっと？）

黒崎部長のスマホの画面には、頬袋をパンパンに膨らませたリスの写真が表示されている。

「めちゃくちゃ可愛いだろう！」

「は、はあ」

（確かに可愛い。めちゃくちゃ可愛い、けど……）

鼻息荒く詰め寄られ、私はたじろいでしまう。

「それからこれ！ こっちは昼寝中のアリスだ。しかも俺の手の上で寝てるんだ。やばいだろう」

「や、やばいです」

二枚目は、黒崎部長の掌で眠っているリスの写真。

そのあとも、彼はアリスの可愛い写真を私に見せながら、活き活きとした表情でいかにアリスが可愛いかを力説する。

（あ、これは……）

私はてっきり、黒崎部長が私にお菓子をくれたり飲み物を奢ってくれたり、こうして食事に誘ってくれたりするのは、口止めの一環なんだと考えていた。

でも違う。これは……

「聞いているか高梨！　うちのアリスは気性も穏やかで人懐っこくて……」

（ペット自慢の相手としてロックオンされただけだー!!）

周囲にはリスを飼っていることを秘密にしている黒崎部長は、きつと今までペットの話ができる相手がいなくて、鬱憤が溜まっていたのだろう。

そう思わせるくらい、彼はお酒や料理が運ばれてきたあとも、ペット自慢を続けた。

もう、どんだけ話したかったんだよってツッコミを入れたくなるほど。

黒崎部長つてば、本当に……

「アリスのことが、大好きなんですねえ」

私はふふつと笑ってしまった。

だってなんか、無性に可愛く思えちゃって。

すると、黒崎部長は何故か息を呑み、押し黙る。

いえいえ、馬鹿にしたわけじゃないんですよ。

熱烈にペットを愛する気持ち、私にもよくわかるから。

私だって、太郎さんの自慢を始めたらきつと今の黒崎部長みたいに……いや、ここまでひどくはないな。うん。

でもとにかく、微笑ましいなあって思ったんだ。

「今日はいくらでも聞きますから、アリスの話、いっぱいしてください」

「ああ」

私の言葉に、黒崎部長が嬉しそうに顔を綻ばせる。

（わっ）

その穏やかで優しい表情を見て、私はドキッとしてしまった。

（仕事中も、もっとこんな笑顔を見せてくれたらいいのに）

そうしたら、職場の雰囲気もずっと良くなるんじゃないかな。

ああ、だけど黒崎部長がたくさん笑うようになったら、彼のことを好きになって仕事が手につかない女子が続出しそう。それはちょっと困る、かな。仕事に支障が出るのはよくない。うん。

何杯目かのビールを飲みながら、そんなことを考える。

「それでな、高梨」

「はいはい、聞いてますよ」

そしてこの日、私は終電間近まで美味しいお酒と料理を楽しみつつ、黒崎部長のアリストークに

お付き合いしたのだった。

その飲みの日に聞いたのだけれど、黒崎部長がアリスを溺愛していることは、私以外知らないらしい。

社内の人間はもちろん、友達や、離れて暮らすご家族にさえ言っていないというのだから驚きだ。というわけで、部長は私以外にアリスの話ができる相手がおらず、以来、私はすっかり部長のペット自慢を聞く相手に認定されてしまった。

ペット話をする時には大抵食事とお酒も込み。部長とは食やお酒の好みも合うし、一方的に話すばかりじゃなく、私の太郎さん自慢も聞いてくれるので、なんだかんだで私も楽しんでる。

いやあ、思う存分ペットトークができる相手がいるのって、いいね。

それに、普段は厳しい黒崎部長が相好(そうごう)を崩して嬉しそうにアリスの話をする姿は微笑ましい。私は自分だけが鬼上司の意外な一面を知っていることに、ちょっとした優越感も覚えていた。

ちなみに黒崎部長とアリスとの出会いは、今年の四月末。

当時の部長は、部下がミスを連発して残業続きになるわ、取引先に謝罪(あやま)りに行く羽目になるわ、その分、仕事はどんどん詰まっていくわでストレスが溜まっていたらしい。

思い返してみれば、この時期の黒崎部長は鬼気迫(ききせま)る様子で、いつも以上に近寄りがたかったかも。で、話を戻すと、ストレスを爆発させた黒崎部長はその夜、仕事帰りにふらっとペットショップに立ち寄ったのだとか。モフモフな犬猫や愛らしい小動物に癒(い)しを求めているんだそう。……末

期だったんですね。

するとそのお店で、可愛らしい仔リスが売られていた。それがアリスだ。

『見た瞬間、運命を感じた』

と、ビールのグラスを片手に恍惚(こうつ)とした表情で語る黒崎部長は正直ちょっとキ……いや、なんでもない。

で、黒崎部長はそのリスを衝動買い！

さらに店員さんに勧められるまま、リスの飼育に必要な物も一通り大人買いした。

そして今に至る、と。

ちなみにちょうど同じころ、黒崎部長は仙台支社時代から付き合い合っていた恋人と破局していたらしい。

お互いに仕事が忙しく、転勤前から関係が悪くなっていたんだそう。納得ずくで別れたと言っていたけれど、たぶん仕事のストレスに加え、恋人と別れた寂しさもアリスを飼うことにした理由の一つなんじゃないかと私は思っている。

黒崎部長は、「アリスは俺の癒(い)しなんだ」と語っていた。

部長の仕事量を考えると、小動物に癒(い)しを求めたくなる気持ちもわかる。

まして彼は当社最年少で部長職に就任した人だ。その分、周りからの期待やプレッシャーも大きいはず。

愛情を注ぐ相手がいるっていうのは、このストレス社会で生きていく上で、大きな支えになるん

だろう。

部長ほどのプレッシャーやストレスを感じているわけじゃないけれど、私も日々、愛犬の太郎さんに癒^いやされているので、その気持ちはよくわかる。

太郎さんがいてくれるだけで、辛いことがあってもまた頑張ろうって思えるんだよね。

だからさ、もう好きなだけ可愛がったらいいんだよ。

三十過ぎの男が、リスを溺愛したっていいじゃないか！

私でよければ、いくらだってペット自慢を聞きますよ！　ただし私の太郎さん話も聞いてくださいね！

そんな気持ちで、私は黒崎部長と秘密の関係を続けていた。

そして十一月半^{なか}ばの金曜日。

今夜も部長に誘われ、私達は食事がてらペット談議に花を咲かせることに。

黒崎部長と食事をするのは、もっぱら金曜日の夜が多い。休み前で気兼ねなく飲めるしね。

ただし時間は、いつも一時間ほどで切り上げる。終電近くまで飲んだのは、初めてペット自慢をされた夜だけだった。

なんでも、家にひとり残しているアリスのことが心配なのだから。

かといって、定期的のアリスの自慢話をしないではいられないらしく、結果、今の形に落ち着いた。

今夜のお店は、会社から離れた場所にある洋風居酒屋。個室はないけれど、仕切りで各席ごとに区切られているので、人目を気にせずにいられるのがいい。落ち着く。

「お待たせいたしました」

注文してしばらくすると、店員さんが料理とお酒を運んできてくれる。

テーブルにそれらが並んですぐ、黒崎部長が甲斐^{かい}甲斐^{がい}しく料理を取り分けてくれた。いつもながら手際が良い。

本来なら部下でかつ女の私が女子力を発揮するべき場面なのだろうが、部長は人にやつてもらったより自分でやりたい派の人だと何度か食事を共にして知ったので、ありがたくやつていただくことにしている。

「ほら」

「ありがとうございます」

綺麗に盛りつけられた取り皿を受け取り、礼を言う。

「美味^{おい}しそうですね」

「この店には何度か来たことがあるが、ここのトマトとバジルのパスタは絶品^{めいじん}だぞ」

ちょうど今、部長が取り分けてくれた料理だ。

湯気^{ゆげ}と共にトマトとバジルの良い香りが立っていて、よだれが湧いてくるくらい美味^{おい}しそうである。

それではさっそくと、私はフォークでクルクルとパスタを巻き取った。

(ありやりや)

しかし思ったより量が多く、塊かたまりが大きくなってしまった。

(うーん、いけるかな？ いける……な)

また巻き直すのも面倒だったので、ふうふうと息を吹きかけたあと、あーんと大口を開け、ぱくんと一口に頬張る。

(おいしー！)

口いっぱいに入っているので声に出して言うことはできなかったけれど、私はにこにこ顔でもぐもぐと咀嚼そじやくした。

(……ん？)

ふと見ると、黒崎部長が Pasta に手をつけず、なにかこう、微笑ましいものを見るような、生温かい視線を私に向けていた。

「高梨は小さい割に、よく食うよな」

(ムッ)

確かに私は背が低い。

しかも小柄で華奢きゃしゃならまだしも、チビな上にぼちやりしている。

それがコンプレックスでもあったので、部長の言葉にムツと眉を顰ひそめてしまった。

黒崎部長はそんな私のしかめっ面めづに気付いているのかいないのか、さらにこう言った。

「そんなに頬を膨ふくらませて、まるでうちのアリスみたいだ」

(頬……、頬袋)

部長に悪気はないのだろうか、ここは「リスと一緒にしないでくださいよ」と、笑って流せばいいだけの話なのだろうけれど……

『お前は今日から、ハムスターのハム子だ！』

「……………」

「高梨？」

嫌なことを、思い出した。

私は昔からこんな体型だったので、小動物に例えられることにはまあ、慣れている。

特に食べる時なんかはつい口いっぱいに頬張ってしまうので、ほっぺたが膨ふくらむこともしばしば。その姿がハムスターやリスのようであると、よくからかわれたものだ。

昔はまだ、そんなに気にしていなかった。ハムスターやリスは可愛いし、似ていると言われても悪い気はしなかった。

それが変わったのは、つい数年前のことだ。

私は大学卒業後、今の会社に入社した。新入社員研修ののち、営業事務として配属されたのは第一営業部。

当時、私には四十代の営業事務の女性社員と、二十代の営業職の男性社員が教育係としてついていた。

営業事務の先輩は優しくて親切な人だったのだけれど、この営業の男性社員が……

『お前、なんかハムスターっぽいな。よし、お前は今日から、ハムスターのハム子だ』
 そう私にあだ名をつけ、何かと私をいじるようになったのだ。

最初は笑って流していた私も、さすがに別の部署や社外の人の前でまで「ハム子」と呼ばれるのに辟易^{へきえき}して、何度も「やめてください」と訴えた。

しかし先輩は「ハムスター可愛いんだからいいじゃねえか」と聞く耳を持つてくれなかった。私が昼食や差し入れのお菓子を食べるのを見ては、いちいち「おお、今日も頬袋^{ほく}膨らんでんな」とからかってきたり、おつまみのひまわりの種をわざわざ買ってきて、「お前の大好物買ってきてやっただぞ」と食べさせようとしたりと、執拗^{しつよう}に絡んできた。

そんなに毎回頬を膨らませて食べていたわけじゃない。特に先輩の前ではほったたを膨らませないように気を付けていた。けれど、頬が膨らんでいなくてもからかわれたし、絡まれたのだ。

それだけでなく、私のことを頼りなくて仕事のできない人間だと決めつけ、ちゃんと仕事を教えず、コピーとかお茶出しとか、そういう雑用しかさせてくれなかった。

見かねた他の先輩達が教えてくれたり、仕事をくれたりしたものの、少しでも失敗しようものなら「ほら、やっぱり」と鬼の首をとったように嘲笑^{ちやう}し、「ハム子だからな」と馬鹿にした。

あのころは、先輩に小動物扱いされる度^{たび}、社会人として、また一人の人間として認められていないのだという気になって、どんどん自分に自信がなくなっていくって、辛かった。

一時は退職を考えるほど悩んでいたのだけれど、幸いというか、その先輩が大阪支社に転勤することになって、ホッとしたつけ。

残った人達に私を「ハム子」呼ばわりする人はいなかったし、その後、私も第二営業部に異動になって、今に至る。

それからの日々は、たまに鬼上司に雷を落とされたりと波乱もあるけれど、とても平和だ。

先輩や同僚にも恵まれていると思うし、最初は怖かった鬼上司とも、こうして一緒にお酒を飲めるようになった。

だけど、小動物扱いされるのがトラウマになっていたんだなあって、今の部長の言葉で気付かされた。

もちろん部長に悪気がないことはわかっているけれど、美味しい料理に弾^はんでいた気持ち^{もち}が、どんな^{なん}よりと沈^{しず}んでしまう。

「高梨？ おい、どうした？ 大丈夫か？」

「あっ」

急に押し黙ってしまった私に、黒崎部長が心配そうに声をかける。

はっと気付いた私は「す、すみません」と苦笑した。

「ちよつと、ぼうつとしちゃって」

「体調でも悪いのか？」

「え、と」

(部長の言葉にトラウマを刺激されて、しばし思考がトリップしちゃってましたくなって、い、言えないよ)